

社会に向かう主体的信仰を目指して

おやさと研究所教授
金子 昭 Akira Kaneko

宗教の本当の問題とは

社会心理学者のエーリッヒ・フロムは、宗教についても非常に興味深い考察を行っている。「宗教とは何か」という宗教の定義は、宗教学者の数だけ存在するとも言われるが、フロムによれば、本当の問題はそれが宗教であるか否かではなく、いかなる種類の宗教かなのだという*。すなわちその宗教が、人間の発達、とくに人間的な力の開花を促進する宗教なのか、それとも人間の成長を麻痺させる宗教なのか、この区別こそ問題だというわけである。しかもこの区別は決して単純なものではない。というのも、その宗教の信仰者が、彼の信じる教義とは全く裏腹に、行動においては別のことを行っている場合もあるからだ。そこには、フロムの深い社会心理学的洞察が伴っている。

フロムは鋭く指摘する。「もし一人の男が愛の宗教を口にしながら力を崇拝しているとすれば、力の宗教が彼のひそかな宗教であり、彼のいわゆる公の宗教、たとえばキリスト教はイデオロギーにすぎない」と。この男がどんなにキリスト教を熱心に信仰していると公言しても、彼の本当の宗教はキリスト教ではなく、古代の異教さながらの野蛮な力の宗教だというわけである。そういうふうに見るのでなければ、19世から20世紀にかけて、キリスト教国家の欧米人同士の間で、あるいはキリスト教でない他の国々の人々に対して、どうしてあのような恐るべき殺戮や貪欲な搾取を行うことができたのか、説明困難になるのである。

しかし、それならそれで、なぜ彼らは、「イデオロギー」であるキリスト教を捨てようとししないのだろうか。幾つか理由があげられる。何よりも、そんなことをすれば、人々が規律を失い、社会的結びつきが崩れてしまうからだ。宗教的イデオロギーは、建前としてどうしても必要なのである。そして、さらに重要な理由は、自己犠牲の大いなる愛の神を信じることで、そうした愛の行為はイエス・キリストがすでに自分たちの代わりに行ってくれたとして、自分たちが今行っている野蛮な振る舞いを正当化できるからである。フロムは、この心理的機制のことを、「疎外された信仰」という表現で述べている。それは、自らが自らの信仰を引き受けず、その信仰を外側に追いやってしまっ、信仰喪失の状態に陥ることを意味している。

生き生きと社会に関わる宗教をめざして

「疎外された信仰」から回復するためには、宗教の信仰者がこの自分の姿を正面から見据え、しっかりと自己批判することが不可欠である。そもそもキリスト教が愛の宗教であり、しかも人間の内には愛への深い要求があるのだから、もしその信仰者が深く反省するならば、自分の所業に罪悪感を覚えるはずだ。認めたくない自分の姿をきちんと認め、徹底した自己批判を通じて信仰の自己分裂状態を克服していかなければならない。

フロムによる一連の社会心理学的分析は、その宗教の信仰者が表も裏もなく真実な生き方をしているか、また彼がどれだけ生き生きと信仰生活を送り、どれだけ自他の生きる力を促進し発展させているかといった、宗教の人間的・社会的あり方について、我々に大きな示唆を与えてくれる。そのさい何より大切なのは、自分の信仰がいつのまにか「イデオロギー」にすり変わり、「疎外」されていはいしないかどうかと、たえず反省し自己批判していく姿勢である。そのためには、宗教に関わる一人

ひとりが精神的に自立し成熟して、自分自身の“人間力”をつけていかななくてはならないだろう。

今日、我が国においては、宗教への風当たりは非常に強い。宗教関係者は、メディアが宗教の醜聞ばかり報道するなど愚痴をこぼすべきではない。それは宗教に対する日本社会からの要求や理想が高いからこそ、現実の宗教批判もその分厳しくなっていると、率直に受け止めるべきである。そして、自ら現実社会と噛み合った問題意識を持ち、真摯な自己批判を通じて打開策を模索すべきである。そのような自己批判があつてこそ、現代さまざまになされている宗教批判を自らの中から克服する展望も見えてくる。自己批判無くして自己主張するだけでは、社会の動きから置いてきぼりにされるだけだろう。そのぐらいの危機感の自覚こそが今、宗教界には求められているのである。

この「今日の時代における宗教批判の克服学」の連載で、私が一貫して説き起こしてきたのは、まさにそのような視座からの諸検討であつた。「宗教批判の克服学」なのに、ときに「宗教批判」の部分ばかりがごく一部の読者の印象に残ってしまい、誤解を受けることもあつたのは確かである。しかし、私がこれまでの議論で意図したことは、宗教がどうしたら今日の時代において生き生きと現実社会に関わっていくことができるかという一点にあつた。幸いにして、大多数の心ある読者諸氏からは、力強い励ましと応援を寄せていただいた。心から感謝を申し上げたい。

おわりに一カフカの寓話から

最後に、一つの寓話を紹介して本稿を閉じることにしたい。カフカの小説『審判』の中に出てくる「掟の門」という寓話である。

ある男が、「掟の門」という門の前にやってきた。しかし、門の中に入れず立ち往生してしまった。門は開いているものの、そこには門番がいて彼の入場を拒否したからである。男はせっかくやってきたのだからと、門番の許可を得るべく、ずっと待つことにした。何日も何か月も、何年も何十年も待ち続けた。その門にはほかに誰も来ず、それは男のために存在することが判明した。門番もまた、彼のためにいるようなものだった。しかし、ついに門は開かれることはなかった。そして男も門番自身もすっかり年を取ってしまった。……このような謎めいた内容である。

この寓話には、いろいろな解釈が可能であろう。私が思うに、男が門番の言いなりのままだったのが問題ではなかったかということだ。門の中の主にうまく話をつけて内側から開けてもらうか、門番など無視して門の中に飛び込んでいくか、あるいは、そのような門にこだわらず、さっさと見切りをつけてしまってもよかったのではないか。いずれにせよ、男は受け身の姿勢をきっぱり止めて、自分の未来を自分から主体的に作り出していくべきだった。門とは、また門番とは、実はその男自身の問題でもあつたのだ。

一つ確かなことがある。それは、門の外には現実の生きた世界があり、多くの人々が我々の手助けを待っているということだ。人間としてなすべきことは門の外にこそある。眼差しを広い社会へと向け直して、彼らのもとに駆けつけて行こうではないか。(完)

* エーリッヒ・フロム『生きるということ』（佐野哲郎訳、紀伊國屋書店、1977年）、184頁以下を参照。